繪本西村物語 四

遠

遠門
巻 9

明治世相横浜新聞

復讐奇説 田村物語 巻之四

武蘭 川上 龜老人 編輯
下流 梅梢軒蘭旭 訂正

第七回 惡報の緒

備中勢州鈴鹿郡。鈴鹿山といふなり。坂路八町九七曲ありて。一名を多津加美坂といふ。伊勢近江二州の堺(今は此堺を立場なりて二州の封示を立て沢村と云)ふ。あり。て極て山深し。麓を鈴鹿川(一名八十瀬川)といふ。回くて。岩流あり。流末を筆捨山の河ふ續けり。此須を盈さん物凄く。山賊なども此山ふ寨を構へ行人を惱ぜばさ〳〵ぐ〳〵ふ人跡絶て稀なる人十人二十人連を待得て往来白しなれとも。怪れふ刑部太郎いふ山路を夜を込て一人過りぬる而已ふ。瘧疾のふふ打惱ミ苦ふ

を。件の山賊ども捕へて鈴庫山の寨に連れ帰りて。早夜八ツの
ぐ〜と明くれば大勢の賊ども集りて。何とて今朝八ツも遅かり
き。将夫なる人いいつなれ訳あり連れると問ふ。四人の賊ハ霄
より手足を冷かさまり。寒さの耐がたれ。物をも云ど山ふ降る
やいなや。早くも柴折らざ我先ぶと。或ハ松の樹のごとくなりて延
てあ〜わ。又ハ獣のごとく股打廣げ。さなり火近ふ寄りて暖り
ると也。折ら。鐵權二そ。ろうど差〜ぎし松の枝よ蹶ぶ。ぶ
ども爐中の燃火八方へ散て。時なる刑部太郎が襟のワり
より。胸の辺まで件の燃火ハ搭かけられ。大ふ驚き四五尺ばかり
飛ちり。左右のまふ火を打拂ひしが。襟〜入〜れ火の。頃ふも消
ぬ。立つ居つ頻ふ苦しみ。漸火を消ねと云ひ。

不意瘧疾を忘れ始〜爰の光〜れ如し。刑部太郎ハ跡ひ仏中
ふ〜ひ〜れハ。ものふ〜も速ふ病の愈〜ふ。今我力ハ以て彼等
の小賊を。五十人ト百人打殺さんハ易ハ〜ど。平竟我為ふ
ぞ。不如彼ふ屈伏せ〜。今日ハ此山陣の魁首となれんふ
中〜ふ力ハ費さんよりハ大ふ勝れり〜ふ〜ふ点頭ふ。竊ふ妖術の
印を結びて立〜れ時。ぶ〜ぶやと一朱の黒雲弟下り。彩霞を繞る
と云へしが。忽席上ハ更ふ咫尺を弁ぜ〜ぬ。冥〜として混沌未ふ
ぞ〜ふ〜ふ。衆賊大ふ驚たとハ雖も爰ふ〜ふ〜ふ〜ふ迷ふ。
中ふも此山の魁首立〜れ者三人あり。其一ハ鐵權二ハ二の鬼首
眼羅。其三ハ鏃軍太ふ〜ふ〜ふ。鉄權二ハ大音あげ〜ふ。ふ〜ふ
疇昔夜捕へ来りし旅人の。先ふ火と打〜ら〜れ不計祝融神の助

刑部太郎
岩岸刑部太郎
鈴鹿山ノ
悪賊を
伏せ

を得ゝ。頃ハ癒を忘れられ。是ホの妖術を以て。我と遁んとするなり。
どし。いざ〳〵大勢おのつゝ速ハ打殺せと罵ル。鬼首眼義。鎌軍太
も。声ハ應じて突鐵が察ル洩じ。夫組伏よ打居よと呼ばり。
賊一度ハ仆るゝと。爰ハ組つゝ彼方よ投ど。目刺もちゝぬ真乃
間。ゝ同士打ゝ合せく。傷の様ハ弱腰くだ。此方の柱ハ
天帝を打つ。或ハ陰嚢ハ蹴ゝ痛め。くゝり轉ゝ仰向に成迷出
踵ハ蹂られ。又ハ起立ハ。倒れ臀尤ゝ壺中の蛙の如く。
暫時騒動ゝまぢりけ。ば刑部太郎ハ梁よ登りて足ハ成るハ。忍
つゝ一笑を催しゝが時分ハ。はしと梁よ飛下て件の妖法ハ納
早くも様先ハ有りゝ。橋柱ハ刊ハ。ゝ水鉢ゝ引抜て目
ゝも高くさし上て拍ゝ。雲消失て看くあれば大の男ハ眼を

怒り件の石ハ捧ゝ。實韋駄天の荒る如く。又も驚く斗り
なれが甚時刑部太郎ハ大音ハ。汝等今より我を立く魁首ニせど。
命ハ助け倍ハ身の安楽を計ゝ。看我力をまい此如ゝ。持
ゝ石を荒ゝの土ハ高いやと投附ば。地中ハ入ゝ三四尺。研
よ響ゝ。そゝ。是ハ成て鐵を始衆賊ゝ及ゝとゝ。
頭を地ハ付ゝ。旅くハ今より我ホが頭となるのゝ。此山陣を守
たまへ。誠ハ君ハ。ゝも人間ハ非じと。且ゝ驚た。ゝハ忍懼て各
心伏ゝ。ゝけ。ば甚刑部太郎ハ打笑ゝて我ハ韋駄天刑部と
ハの者ゝ。今ゝ心を傾けく我ハ得ゝ。衆賊始
く安堵の色を。ゝ大ハ悦び。我等よ魁首ハ得く。此山長
ハ繁茂くゝと。急ぎ猪鹿を悪美と。ゝ大ハ酒宴を仆ゝて

款待ありし。韋駄天又いくらく凡人を剥取ふ。切殺さんハ力ふ及ざる
附なり。其所以を人命を殺へ厭ざれとも。衣類を切裂血ふ塗
れハ借ざくべ皆我ホが益ふあらぬ計を以て
是を社奪ひとり。及ぶる附を殺つぶし将我ふ一ツの妙策あり。
今より汝ホ諸方ふ散じいらふも計て虎豹の皮を取ふり。面こ
腰ふ纏又白毛を紅を染ゐし髪ふ被て頭を包へし。足ふ種々
の獣の皮を臑當とせよ。其外面こ心を足して鬼形ふ出立ぶし是を
名付て魔軍と呼ん。是おのぢうふ我妖法を行んふ勢ひを添る所
なりと。辰を解し解示ふ各歓び。実大王を武勇ぢう智謀乃深
事我ホ如きの知べきにあらぬと。一入ふ感佩して是より日夜ふ仏を
つ。終ふ各件の鬼形を成就して。新ふ加る味方あれい此鬼形の服。

一具ぶ作を魁首より惠ぶ其後を面この立ふ任ぶ。左ハ農賊
いくく勇と得て此山ふ籠て前後左右の要害堅固ふ営ぶ。扨て
鬼形の出立して近き辺を徘徊して美女を山陣ふ送り。又ハ金銀
衣服を剥取或ハ打殺し切殺して行ふ人く鬼住山と云ふ恐あり
ると。去程ふ延暦十九年睦月もすゑの頃なれば。
木甲斐守照門が舘ふ大伴負純ふりて共ふ盃を傾抑奏り厚
けれバ互ふ心の事ふ形く語り合ふが中ふ。負純折を計て云
ふハ。我近頃を行くと家の不仕合のこと多く。是が為ふ金
の数を費し遣ひ剥るにさし迫る入用の金二千行あるべ
い。いかも家人ホの扶助ふもなりがたふ。願を君憐ふ我無ひ
て密く二三行の金を暫時ハ貸ゐんやと。いとも衰を含て

憑けれども照門答へず。如何あるも二三行のうちは伏しぶし。某が家人ら
へも得言はでして用主奏ぶせん折柴郎ゐ返しまく。傍なる襖屏さ
て。半己が身をさし入れ件の金砂望の如く取揃へ渡しまる。
負紙ハ頭ゐ整ひ〻と悦び。押戴く〻幾度か謝言を伸るゐ。照門ハ
打笑ひ斯まで懇よみ〻これ中よみど聊のうゐかく殷懃の
言つくしまふゆ。はて我ゐも少しく親ふるゆあり。いろ〻世話ゐしまふ
らんやといふ。負紙ハ今のうち嬉さゐ兎角ゐも及がど。いひ出ま
某ゐ叶べさ沼のうゐいが成事ゐてもゐしふせんとあれば。其
時照門声を低し〻御ゐ辺ハ兼く
知るべく我妻白波ハ。ゐねる比狐狸のうゐゐ心を奪はしが。その後
も折ふ〻ハ常に替はらぬ。

乱のおとく〻苦れて柘子ゐて。柘くれ事口走り。片時も心の免しがと
れば。扨こそ夜の契も絶く〻我こそ強いと淋しゐ。往こ沼寡と
なりし田村磨の妻。月雪こそ世ふ双ぶ方なれ美人かり。今ハ中納言
種継のうちに戻まく何ふゐいと心憂く。彼ハ獨寡の尤こそ淋しく
ばかりおりゐ。いふゐも彼を我後妻ともゐしゐるゐれ誓ふ
べんば。白波が事ハ仏乱しゐ。彼が親の許へ戻しゐば足
にまる設喜をあはしとおもふ形り。況邊此こと仏を得て紙ふ計
給ひてんと語ゐ。負紙ハ心中ゐ只悶るばかりゐれが。流石奸邪
の性なれば何ゐ立夫ゐしゐんと肯折しも。後の襖ゐかば〻踏
顧し。丈ゐれ黒髪ゐ振乱し。目眸逆ゐ上りいふゐ照門君。白波ハ
先刻此所ゐありて生まれ変りの忍物語ゐ審にゆゐる念合さよ。

照門室
白波狂乱
市中へ
敵走る
大伴貞純

ちゝみこ
与木照門

いうで夫婦の情を露も知らざるやと云も終に照門が殺されを。照門怒り又も物ふ狂ぬるかと刀の鞘ぐるを打拂ひんとせしが。如何仕らん鞘ハ遥ふ彼ぐ。白刃忽白波が乳の下斜ふ切過ぐ。血汐流て紅白波ハ狂ひ回りて裾引裳。外面の方へ欠出バ。それ追止よと照門負紙左右へ走りて呼れふ。白波ハ彼がおとくれて市中にて欠出しいと怖ろ敷声音あり。照門刑部と謀計を合せ。負紙高貫を荷擔延壽石のうめ荷田磨を葬れるやも其謀計を殘なくいたづらに。市中ハ吟ひ回ふ。市中ハ人の山をなし。是を笑るもあれども。眉ハ顰ぎれハ。彼女こそ負ふ物狂ひしたふ。拙くのことは走ぬぞあるんづと。是則神佛の人をして言ものふ惡逆の報ひなるふ。抔にくに唱照門の家人を追て馳ぬりて漸と。白波をとり

押ふ。白波ハ脫血絶ぬ。いと苦寄ふ一声高く狐の吼声して。その侍島を絶ふ。是ハ又照門ぬ。悲歎き。夫く懇ふ取あつかひ。負紙ハ暇を告て帰らんと。大伴高貫忙ぎハ。照門負紙を物陰ふ招き大息吹て言ハ。我ハ計ひ延壽石を以荷田磨父子ハ葬ぬ。必何しそう近頃藤原の是公郷へ委細を告し者あるはしめて。是公々より潛ふ風笛ハ笛を紛しまふ折ふ。先刻白波の手狂氣の体ハ云ぬ。市中ハ走りあるを。是公御の家臣を得てことの元符合せりとく。速くも告しめや其ことハ知ぬ。我くこを捕へ捕へ。あるぬしとて。只今是公郷より此所へも人数を向られはし。我ふ告る者あり。しゆゑ大ふ驚る比猶虛實ハ窺よ。実も笛しふ

我ホ三人を召捕んと大勢勇れさせ。我腚と足留まりわはべ。斯なるうへハ我ホ言逃るとも及ばじて。終ホ命ハ失ふよ至らんを。うゝとゐし居べた所ホわゝびいざ何方へなりとも共ホ身を隠し。折を計て又是公をじめ我ホが妨ヨ成べき人ゝハ計るべ。終ホ兼ゝの大望成就して。天下ハ我ホが掌に入ゝんさし當りてハ走ハ上策とされ外手段もなしと。其半ハ語りも敢ず。くや捕手の大勢来るホ。照門負純驚き怒ヨ取るものも取あへず。日の暮れを幸ホ。高貫諸よも夜ホ紛ヨ足ホ任せ逃ヨ出。いざこゝも彼く逃失ふ。斯て捕手の大勢入まりて此所彼所ゝ求ふホ。更ホ照門ハ又へず。館の騒ハ門の湧ごゝく老若男女迷て哭叫を。捕手の人ゝ制て曰。汝ら騒るなれ。ゆ木照門

大伴負純同高貫三人ホ。是公卿向りせまるホ子細あれば。我ゝ打向ひふ。汝ホ罪ヨし早くホ三人が行清を告よ。若偽りて隠し置ば。其罪汝ホ身でも遁ヨはじたぞと声ゝに呼れホ。誰あつく答る者も彼ゝれば。捕手の面ゝ大ホ怒ゝく中ゝも賢げる四五人の家ゝ厳く責問ホ。若痛ホ耐して忍ゝく言出ゝれハ。獨ホ大伴負純まりく。四方八方の物語ありしよう。白波の狂氣して照門の奴小死し。今又大伴高貫まりて何ゆふん密ホ三人語り合忙しく取物もあへず。家人さへ具さびして。此騒よ彩ヨ何方へ走り去るゆゝも。残なく皆一同ホ仕揃へ蓋の根も合ず首尾を説繼ヨ。扨た我ホが打向ふを早も悟りて逃失ふ。左あらば是非なしとて。照門が家財ふて道ふ貯ヨ今眼宝貨山のごゝくありしを。ゐて

倉廩皆封じ閉ぢて所となりぬるこそ悪業の酬ひ速なるも豈天命なるべや然るを照門がつぶ〳〵家人ども〳〵収置し小なる匣の内ひとつ残れる重のみ封じ込こめ上の照門自筆にて以て金縢と記し服ふ不許他見とのりたれば捕へられの人〳〵あづけて是を開くとせしが一人がいふらく是こそ其侵を持ちたりて是公卿ふ捧べし我〳〵謾ふ開くへ倉卒の至るべんとりへば皆尤なりと是ふ同じ〳〵れ叔照門の家内一人も出入城許さざと厳く番をつけおき夫より件の匣にて紙を立ちり是公卿ふ献しるべくもめへあげて彼匣とをれが是公卿と忘だ開と〳〵ふ〳〵俄猿や早良太子の御筆ふて照門自紙高貫ふいうふも討を廻らし坂上父子を失ひ其外障ともなるべき忠義の人〳〵をば追〳〵罪ふ蒙して遠ざけ早く天下にもしめをふ成敗したん

ふは恩賞ハ面し望ふ仕るべし。是ふも角ふも刑部太郎が謀討を憑給ふとの密命の御書なりけるべ是公卿ふ献巻て眉を顰り入。其侵ふ又封をし御心ふ慮らせるふ有りて更ふ他人を許給ふ。我〳〵彼知ふ打向人彼ふの家賊をも皆討ぢ城入城免さで此上の内下知を待侍る形〳〵と告奉るに是公〳〵つ〳〵仕に出入城。夫より件のつぶも及び太子の御事ふて落もるく天皇ふ密〳〵に奏聞るしまひけるべ。天皇大ふ驚給ひ。且逆鱗在て則是公と以て早良太子ふ責問まつれ怪なる證あれ上ハ固辞しまふ御ことの葉も形〳〵。終ふ刑部太郎が討ふ従ひ。照門負紙高貫ふと示合せ。延壽石を以て荊田磨ふ寛ふ

為〻のひとゝ皆盡告まひて。罪を伏しまひられば。茲をもんく月卿雲客竊に種〻と評儀ありて。早良太子御病のよしを申し。東宮を廃しまひ。一室に永く押込奉りぬ。是非もなくてゝもなり。されば至尊の御方にも自作まふ孽に活まふるの能とぞ思べきの極なりけり。将照門貞純高貫の館に皆両拂つせ。家人ホハ御咎の沙汰なく仁恵こ深うりけとぞ。皆ゝ少く離散せしとぞ。去ぬるに当今の御子。安殿親王を太子と定まふ。後に平城の天皇とぞ申まふ。是ゝ此一件のゝ御沿ぬとゝ。照門刑部太郎ホ首領人を始め。貞純高貫等は行清草と分ても奏議ゝとぞ。是公へ勅命下て諸国へその觸ありて。厳重に尋ね求させまひ。ひとれとなり。又彼延壽石とぞ如何

ゝしぬると人をして。早良太子へ尋問せまふに。僧ゝ多くこ浮説ありて件の悪事は顕はるやとぞと日夜太子の御心安ゝ。絶あれまがゝとも成べき石なれがとそ。既に照門に仰て行幸き丙丁まひしとぞ。ひとゝ沖るまふりゝ。斯く天皇い数度後悔まひしまひ。中にも良臣苅田麿を先に。剰田村麿を流罪に。彼が家を亡せしまを深くも歎くせまひ。速に田村麿を召返まふとの御ゝまひしが。是公いくて曰。叡慮淺うふざれ御ことの葉を伸ばしぞ。されども苅田麿も容易に芥石を捧しに其罪なれまふ。殊に一度勅命下て今又。狩しく赦免めん も甚宜まふ。臣が愚意以て考へ。時を待く田村麿に一ッの功を立ゝそべ期に至りて召返。爵禄を授。挙用まふ。

坂上家再栄ゝ。世の人へも障なく御仁慈も深くさにあふぶと公
武残さで奏聞ゐしまひれば。天皇龍顔ことに美志く。実況ア
ところよく其理ゐ當まり。尤あゝへ如何ゐも附至ふべ決宜をこに斗
らひ。努怠るの形うれと密命ありゝれぞ有難さ。是ゐよりて是公
ハ謹ぐ御請ゐりて退朝ゐしまひしとぞ。

第八回　白鷺の便

去程ゐ田村麿の老臣佐く木民部忠順ハ忠義の心ゐ深く往年。
田村麿流罪ゐよりゝ世ゐ物別ゐ臨て託しゐ置れ尊命れ重さゐ
忘ぐ。苅田麿の遺骸を厚ゝ葬て奉り公武ゐ対し月雪姫を守
護ゐして中納言種継卿のゐとに憂歳月ゐ送りゝれゐ。日月迅
ゐ移りゝく白駒の隙過ゐく。早くも延暦九年の春。二月とぞ成

ゝれが。民部ハ月雪姫の御前ゐ出く憂を慰めゐり居ゐ。未
遠山ハ雪ゐ深く。霞の空ゐ長きの春くも麗ゐ。梅も散初て。
漸春の文行を姫君と共ゐ打詠居ゐ折ゐ。雲井を飛ぶ
春の翼を翻して落ゝ。地上ゐ下りれ何ゐん餌を啄ん
とてか。抓こ。又蒼天ゐ登る。こゝの桃ゐ羽を休め居ゝれ春
も二ゝ三ゝ。ゐ朱と放て花廻りて。食を爭ひ南ゐ翔。北ゐ羽打
て奏ぶ。ぶゐぞ。民部ハ不図白雪（拝領白鷺の名）のゐ姿ゐ出。ゐりゐぞ泪
を深ゐ姫君ゐ向ひ申ゐれハ。御覧のごゝ件の鳥ハ宇内ゐ羽
代のゝ一己ゐ生ゝ戯ゐ。姫君の近曽ゐ預ゝ生れ
白雪ハ奉ゐゝも天皇の御手ゐ居られて。御特ゐも奥しゝ。
ゐ秘蔵ゐ。ゐ我君（田村麿）ゐ受ゐして後も亡君（苅田麿）ゐの

災ふ逢まれ刻。御衣を控て豫その凶を告をまうけ。是食鳥ゐぐらもそるしぐ。憐むべきの至りなれよ。今ハ唯ゐ食と云ふるまでは。て。終く郊原ゐ放るゆもみく。纔ゐ命ハ繋までなれい。嗚呼何なる名をるとしへども殿られくい件の者るゐぐも及ぐど。去あても御家盛なる付なりせば。白雪まで。もその徳澤を荷ひて哭くべゐ。ゐ。ゐ。ゐなるき浮世なりくれゐぐぞと。忠信の誠心よりい是ゐけき。彼ゐつけ。ゐ人回らし嘆息なりけ且べ。姫君いさ〳〵でぐにゐの年月憂を慰め兼まゐるゐ。まゐ〳〵今の民部が物がるよゐ。ゐ胸もせまり少〳〵て。何と御答もなく。玉散涙の御涙。ら〳〵と迸勝ゐつく〳〵と滴り流まて。叫とぐるゐ打伏まゐ前後不覚ゐ歎りせまゐぞ痛〳〵く。兼てい慰めまゐ〳〵せんとせ。民部までも。老の鉄ぐ丁あくぐ。御湯ゐ田居せれ居左右人ゐも。諸ともゐ姫君の御胸の裏民部のこゐ涙まぐ押さゐれていく哀ゐ。畔ゐ哭ゐ瞳せしも断なりまふし。漸ありて月雪姫と露さくちぐゐ花の御顔を拭せゐぐら。ゐ声もいと曇り。ゐ民部御身のゆを如く白雪のことを。良人田村麿ゐ別まとふ〳〵る折り〳〵安ゐ託しゐ。御身と共ゐ仏附よと曰れなれば。今より後折〳〵此園へも放〳〵宜ゐ養ゐべし。と宣へ。民部畏て彼白雪ゐ居まりくれゐ鷹い御園の四方陸けく。こん廻〳〵ゐ羽ぐ〳〵て部べれこゐなれべさ〳〵ば雀ゐやゐつとべ。ゐ塩をやとく〳〵せくんとせ〳〵祈しも。不思〳〵白雪ハ民部ぐ拳を放まて東ゐ出さして雲路遥ゐ飛去りくれゐぞ。姫君ゐそぐ。ゐ日頃ゐも仰げ形く花去しハ。如何なる故ゐやと打驚ゐ。

白鷺も
園ふ
放てば
雲井遠く
飛行
佐々木民部

月雪姫

作り〻空ゝを望のぞめば。雲井ゐ消る白雪の影さえ人ぞなりゐけそ。
姫君ハいとゞ憂を添まして。彼鷹を元放ちて。妻良人への
面〻ゝゞ。珠よ今ハ隔てまつらせ。いつ見へなるべき期も知ざれば。
一入疎ゐじなせ〻とありてハ。此身の罪ゑいゐゐせんと打歎まゐ。
民部ハ程文ゐ迷惑して。是皆某がなせる罪なれば。姫君の努
ちゝせまゐ事ハ。あゝぶべ。されども一度花去とハいへども。えより野
鷹ゐあゝ移ば。五七日の内ゐハ尋出て仏を休めまゐらせんゐ。
姫ゝくゐ慮まゐふべゝふぞと慰めちまりて。御前を退き。是より日夜
身ゑ委移て鷹の行衛をこそ尋求めるれ。是より去り折ゐ坂上
田村麿を伊豆の大嶋ゐありて。萬患難を忍びまゐひ。をゝわさ月
日ゑ送り明られ暮〻として。樂ことのゝゝ。ゐ考の御事と云

以回らしまつりけてもいゝ成謂ゐや延寿石ゐ毒ありて人を殺
ひしゆゝん。彼茱萸ハ既ゐ月雪姫の長き病さ頓ゐ愈。その外功能
のまれるゐハ数多ゐれど。人の身ゐ害ゑなるものゐ不審さよされ
どもかゝれ奇石なれば却〻若くハ其用れとゝ為ゐ奇〻良茱
萸も成毒茱萸もなれるゐれ有なゝ。照門ゐ足を知りて幸と計
設〻ゝの狡遐莫口惜き次第ゐ。されべいゐゐも敵を審ゐ知り
ゝゝゝん。迚も家ゑ失ひ此身のいつを限りとも知ざ此
嶋ゐ朽果く。考の修羅の妄執をたゝし奉らで過ねぞやゐ
わと。或ハ怒り或ハ悲まゐゐ。関正市ハ御傷ゐありて。同じ涙ゐ噎
て曰。某いゐ比世代作方よりし付。弓木照門が家臣岩岸刑部
太郎と云れゐ。件の延寿石を世代作方ゐ奪来り。其功能ゑ

伸て世代仇を賣あゝくれ折ゝふ。物の際より窺ふるふその悪相
凡人なるべし是心曲者なるべんと先九分ハ察し候ね。然れハ行末
へ経ゝ照門より彼某石氏亡君ハ薦まゝ。然して後災の到る
事ハ是を考へるとゝ。弓木照門岩岸刑部太郎こそ正しく敵なゝ
めと存さふらへ。いかも君此嶋を遁る都ふたのび登りて彼ハが
有様を暗ふ知しまひなば。終ハ甚審なるべ知得べきふらつまて此
嶋ふかゝて在さんハ君の本意遂ふ便もあじ。ふし願ハ
供奉して粉骨砕身の心を尽し。度く人間を尋求なべ。なゝ
素懐成遂なるべ御本のいべた古人もいくれるあり。陽氣所発
金石亦透精神一到何事不成と美り候へ。とゝく思召立まひ
く此嶋を人知ゝ遁まひ。少ゝ義を捨て大功成立ふ

こそ。大丈夫と謂つゝし。君ハ亭懐を達しまふ上ハ。某も伏願ふ。
暫時の御暇をまうして母妹の離を訪ん。再生の君恩此ハ
ゆべしと忠孝のたゆふ我を忘る。涙ハ流して竊ふ告て去ふ。
田村警ハ召て汝が申ハ所余義も彩く其理ありとハいへども忍
らゝ其宜ふ叶ハじ。如何となれば此嶋を遁生れハ易ふ事なれども。
未足と治定し敬もちゝ都の地ふ隠忍んふ却て我ふとこそ
尋出されて私ふ嶋を去りて法を侵るの罪を蒙ゝ。其付ふ万
ゝ及ぶ。況や讐ハ復されの遑あゝ人やゝ。それハいかもの
良策ハ回し。正しく敵を知う人ハ其付ふこそ汝が申ハ如く小義ハ
捨ゝ此嶋を遁出将ふ志願を遂べ。さに幾の罪を受るとも怨
みなん。夫ハ天命ハ大切の命なる。未天命至ゝ。それが如何とも詮べ

ゐ。只うく心を盡し志懈どんがいなくて神仏の憐みうくんや去ゐそ
も此歳月衣ハ敝き黒磯邊ハ寒猶肌ゐ對へ飢ゐ
だも忍びゐ。漁の業さへ近頃ハ絶て奥ゑ得ずんで。身ゑ
養ふゐたゐ。辛じて其日ゑ過る而已なるも。宿世いゐ成
報ゐや。暫時御言も絶ゑる御顔の。いくゐ瘦景あまひれ給も
おどろゐ浦風ゐ乱き。君臣ともに塵埃よまれたるゐ我ゐの
人ともゐ分がゑゑ有さまこそ。足非もなれるゆるりまれ。たゐ是ども親人
正市ハ共ゐ人臣の礼を失ゐ。日夜身を捨て仕まりゐ。但見
眼前ゐ野雀群集て木立の茂ゐ遁き。軒端ゐ語ゐ来なりゐれ
ど。ゆ何ゐ故おやと田村麿ハ打出ゐ。羽風と對て目前の松
の枯枝ゐ。白雪ゐ一羽ゑ来て憩ゐ。田村麿ハ感じて親人正市

を顧ゐ。あれゑ看。生い白の鷹ハ世ゐも稀なれ。ここそ人皆これゑ
愛なれいゐ珍うゐる事ゐ非や是をゐ府てもゐ。御狩
の時天皇ゐ給りし白雪も。今ハゆ行ゐ。ゐりぬ事など伴て。熟て
打詠ゐ。親人食指を以て指さしていくく。件の鷹れ足ゑ御
覽ゆれ足草つけてゐるハ野奏ゐ。何地ゐ放き来ゐれ
ゐゐんと云も絶らぬに。白鷹ハ松の梁ゑ来て田村麿の傍
前ゐ舞ゐれ。四拳ゑ。ゐ立ゐ。御拳の上ゐ羽を休め。只管四
顔をうち覗ゐ翼を屢羽打て慕ひ。ふれ。ゐ田村麿
をとゐ音御覽ぜられて怨驚ひて白何をゐ。ゐ是平ハ
我白雪なり。如何となれば此鳥の恰好羽の綿といひ。外も似られ
而已ゐ果して證とすべて。中の爪一ツ折れハ鄙ゐ父上の災ゐ

白鷺
君を慕ひて
大嶋に
いくる
石井義人

田村麿
関正市

逢ふべき刻なれば故取まくるにつく斯のごとくいかりぬ。嗚呼悲しかりし
あるじの白雪よ。如何ぞ我を慕ひてか。花ふるうそも鶯とぞ名
ゐるといふるが中ぞも。取分此白鷺へ並くれ鷺と同じかふぶ。さるにば
天皇の御秘蔵ありしも御ひなう。扨もいふ成故あや此嶋までハ来
つしあふんと鷺よ打向ひ戯れさ曰汝我がそのの心浅うふびへ一先
古郷へ帰りて我消息を月雪ふ届てんやと仰あれば。其付白雪ハいく
度が羽ふれて如何ふも果話なふんと思ふさまなれば田村麿ハ涙
も感ぜ起しあひ。数行の血落涙ありしが。終よ彼白雪ぜ義人へ須更
預のひて。さふば消息認めんとしまふ。かれ貧ぜ御伝居ふれば。
青烟文池さ人有合さで詮さべふ。石筆ぜ以て怪げふ紙ふ
嗚よ来ひてよりの始末君臣恙なく憂歳月ぜ経ぬるのども。

巨細ふ記しまひ。又都の板子も其委ぜを伝まひしくなどぼ公の
たけぜ細ことなく書もなく書ふ。是をくるくと巻て。其上ぜ浄袖の
敵をひちぶりて懇ふ包み。又級以て文取て堅く結び。是を白雪
の足よ聢と結付。扨も鷺よ向ひ人よ對れがごとく仰ぐ。此消息
を都よ居を月雪のもとに届よ。返翰あふば再び来ひ。傳聞
漢士ふ消息の使せ大もありしとうや。勵よや白雪と宣ひて
放まへ。不測や白雪ハ忽空よ翱翔して又西ぜ望んで飛ゆき
ぬ。彼所ふ伏ぜ木民部。日夜ふ分ぜ分ぜをかく。鷺の行衛ぜ
求め。月雪姫も御心ふ。或ハ神ふ祷らせ。又ハ卜筮ふ向
せるどしまへども。更ふ甚甲斐なく。今ハ如何ふ為して欲宜らんと。
千ぢふ御幻を煩ひまひ。日頃信じまふふ観音の隠篆と

取出し深も念じて御心に誓ひなれ。往年良人に別れし臨で天皇より給りし白鷹の貌心を妾に託しましゝ代。今そこ取放ぬ手に過とハいへれども良人の命に違ふるのいぞ其の侭に過れべし若運拙く件の鷹ハ行衛尋ぬる手叶ふまじくバ。此月雪の命存命ざるくも是非なし。良且大悲の恵あらバ頓に白雪の行衛を知らさせ給へと。身に誓て一心他念なく伏拜ミ給ふ。姫の丹誠爰に至りつ於。又観音の恵ミ浅からざりしや。依て木民部忙しく御前に出居手ふハ白雪の居所手をつく暁さ謹んで申るそ。只今某御舘の御溝に添ふて過りける折しも御濠に古き垂ふれ松柏の茂こより。件の白雪飛来りて某が手に留りぬ。然而已あらで足に何ならん附る物あれと。是を改れまでもなく。姫君の

左こそ御心を悩じまらんなれバ。速に事の子細を告へまゐらせく。悦びしめ給ふんと扠こそ居合ぬると。笑を含て委細を伸る。月雪姫ハ唯に酔の醒夢の破しに似ふて限りく悦ばせまひ。これ偏に御身が乃日の丹盡の至れる処といひ。且ハ妾常に信ぜる観世音の恵によりて再び白雪の戻りたるの嬉さよ去ふても足に附し物こそ如何にと。取上てまふに見若げに垢附たる白綾の裂に包なせれあり。打解て閲せしまふに二八計とも悉し旬ひしと一度慕ひせまふ田村麿の御筆にて。細々との消息なりければ。一度ハ驚き一度ハ悦び。實優曇華のさる待得られ。夢かうつゝと先ず御涙を忍びて。御手さへ振へまふを漸と打かへし續給ひまひ兎角の御言の葉にも非し。只管御涙に噎ましぬ暫

ありて御胸を静めまくりの人を遠ざけられ。如何ふ民部近て書て此御玉章を看。是正しく我良人の御筆なれふ包ー服紗を君が御衣の裂あぞあらんと思ふなれ。左あれば彼白雪ハ彼所まで飛行く君を慕ひ奉の志を遂しや。禽鳥さふ斯のごとくなれふ。偶人界ふ生まるく我身狂。此鷹よ及ばざれハ如何なれ過世の報よやと。歎くせまふ。民部い力と附をなりてまふ。何条さるるのゆべたそも人力の及ぶれ処を則天命よ任なれが。財の不運を聖と云ども兎ものふる社ぞ。ちし此御回答を細よ申して。我君の心を易かんじめ。某頃日兼る。岩岸刑部太郎が隠謀敵ふれ。御謀叛ありし早良太子ハ御病のよしあて東宮を退きまし。将照門刑部を郎を始め。負純高貫ホ等と是公卿より。厳く弓求ふ

よしなれど。彼ホ深く身を隠せしとぞ。又照門が妻白波が狂乱の刻。市中ふ吟ひ歩行口走りて。照門刑部ホ討りの。亡君を寃よ落しまふせしとぞ。夢ふ。されが倩考合とれば。我君の雛ゝ疑ふ所もあく。弓木照門岩岸刑部太郎を始め。負純高貫ホもとれふ組せるよしなれハ。是多の次第を我君よ告ふ。我君ハ聞て志のほどハ。兼く某よ別ふ望ぞ竊よ仰ありねとぞ。絶よ亡君の雙言を復よ付よ達べし。兎よ角よ御心を忍まして。時の至れを待ふと眼中涙を深め。忠信表よ顕まして諫くふ。それ月雪姫も其理よ心ふ解。さふば巨細を消息よ告ふ。それよ筆を取ふ。とも。君り危ぶるが。我身女のるなれば。いふ行よ筆ふ。まふものもあふぶ詮なれよ似ふれば。御身の見ゆ。しるところを。

白雪大嶋
久帰てく
田村麿の
夷ひと
安否と
月雪ひめ

佐々木民部

審ふ書記しものつぶ。夫をこそ。我消息と共に巻込て白雪に託し。
再び大嶋に放ゆふんハ如何にと仰されば。民部答く寒く姫君
の宜ふことこそ至極せり。左あらば直に認め奉らんと。御前紙
退き漸おりて一封の書成。姫君に捧れハ。月雪姫ハ紙を自
の消息と共に。貴重の封じ。白雪の足に結ばんとすしに。
嚮に君が石筆を以て認まひしハ。青烟文池さへ共にはゆるせり
ちろ。ちろ。の上と推計られど。是をも共にふせんあらく件
の御消息ふ。青烟文池を添く。紙ハ服紗ふ包。ゆゑて警の足
ふ結びて又も彼嶋に渡りて此返り来こそ。留まりもせてよと
放ゆへハ。鷲ハ又翼を翻し雲路遥に飛去ぬ。さる程に田村磨
も白雪の便いかもと待ゆへども。其後ハ絶て音信もなられば都の

左右ゆふ知ざるべ。いろ〻我宿志を果ん期も知べからず。然ハ如是ハ
譬松喬が壽を保とも何ハせんと。千〻ふ来方往末をもおりひ出
獨懐く孤燈に對して在せ。彩く正市ハ君の御有さまをそ。
心に喜びぞ。いかもして慰めまふせんと。ひしも春の夜なれと初旬
の月れ入ぬ。打晴く。今宵ハ頗和煦なれば。四方の景色も氣
しぶらてえもいふ。波濤の音日さへ絶く。海の面いと穏かなるぞ。
彩人正市ハ君の傍側近ふ進よりてやりなれハ。我君ふハ今日しも
何とゆへん御心惆悵といと憂を增ゆとこそえなれ。折
ふハ。一杯の村醪ふうてを慰ゆふて可ならんふ。某ホ君に陪して一
葉の舟に掉さし。此嶋の湄ふ網を投じて。鱗を得ならんふ。直ふ
蟠炙して酒媒ともなるべ。又れ時の一興ならん。いざとく〻る歩

成程の人と。是非ゐ進めゐ給へ。君臣三人。さすが月の満原ゐ
軽舟を浮め。義人も艫櫂を取て舟をゆゐ。正市も童の昔より。
馴し業なれば投網を引捉舟の陸より出られをゆ分ち。
手の時ゐ打うけ。残る網の半成左右ゐ取捌き。小脇ゐ引附其所
よ此所よと数度網を下せども。更ゐ一つの魚をも得ざ偶引揚れ物も
只これ。水底の藻屑。又ゐ朽れ木履の半足の闕失ゐ抜忌こ
ゐ。ゐ入て田村磨いよ〳〵御心樂ゐ。剰後ハ月さえ雲の打擁
く。中〳〵ゐ舟出せ〳〵もうゐしく。いと臭さめてゐれば。斯くハ詮なし
ゐ。こさ〳〵と舟成嶋の方ゐ漕久さんとせ〳〵折も。忽ち水面ゐ
何ゐん。ゐ〳〵と。音對て臭の躍ゐ〳〵。又獺ゐんどの水上ゐ游び
出ゐ均さ鄭奇。二度三度ゆへゐ。月さえや西ゐ沈そねで玉の夜の

海面ゐ。見定むゐてゐしなけれど。修りの不審さゐ。今音ばれし方
を知縁ゐゆゐて網を投ゐれば。又も件の音。網の裏ゐ響て。正市が
美ゐ對ゐれば。ゐい臭こそ網ゐ入りねと。徐ゐ網を纏て引あげ
ゐれ見べこゐゐひも寄らね臭ゐあゐで鳥なりければ。扨ハ鷲鳥
の為ゐ翼を痛めるどせ〳〵ゐの。命も得ど。死もゆゐで此処ゐハ流
れ来しと。ゐ西。去とてゐ如何ゐ成ゐるゐやあゐん。遽莫何ゐもせ
よ足を今霄の獲物とせんゐゐと。共ゐ一笑ゐ偽〳〵ゐ艇拯子
早めて急ぎ舟成ゐ。嶋ゐ戻て早くも燈火ゐ挑照〳〵ゐれば。
ゐ白の鷲ゐ〳〵。左の足ゐ一つの何やゐん包〳〵物を結はゐれ
白毛總〳〵潮のゐゐゐ濡影ゐ。両翼を屢振し居ゐゐ。左
ゐ〳〵群咲〳〵ゐ菊の風両のゐゐゐ打卧て。露ゐ悩れぶごゐ。

哀その心を痛ましてふ。よく〳〵又是ば豈料んや。是則日夜慕ぜ〳〵ふ白雪めてぞありける。田村麿を是に御覽じて且驚き且悲こして宜く。誰か〳〵ん白雪の。かれさまあてこの嶋ふ流さ者ん〳〵と。端ち〳〵嘆息みしやぐて色ば同き、人ば。月雪よりの一刻乃消息と。書烟文池まで添〳〵れこう。其時田村麿ハ御膝をとこと打く。扨も女の智の浅くるれい是非もなし。鶯よ我より送る消息ふ石筆ば以て書せ〳〵。月雪の涼くも必ん圖こくや。この麿ふ件の爲まで添〳〵こそ日比の伶俐ふ似げつさよ。但某ば今ふ両の已こ〳〵ば配ましょう。既ふ大事を誤〳〵んしまり。危〳〵しあり〳〵と曰て彼ち〳〵雪ば御ふ居こせ。墨を扶さこう〳〵ふ。暫しがはど海中ふ溺るよとおぢくて。いと打悩めれさはなれば。義人ふ

向ひて汝ひ人ふ心を盡し社ふ仁てよと。懇に仰れば義人畏こて鷲ば預り牛ふ〳〵せ。日夜息なく〳〵さこう〳〵ば。日数経て〳〵ふ本ふ復しじれとぞ。彩ぶもも君の爲ふ色と盡し。かれ從ふ逢ぬれば。天も憐を垂ひて。不測ふ鷲の必死を免れ〳〵やと。人毎ふ語りめりこぞ。

田村物語卷之四畢